

早川友久著「李登輝 いま本当に伝えたいこと」ビジネス社 2020年9月16日刊を読む

秘書だけが知っている李登輝の真実

1. ここでは、台湾の近現代史と李登輝の歩みをからめて紹介したい。

- (1) 1895(明治 28)年、日本は日清戦争に勝利し、下関条約によって台湾の割譲を受けた。当時の台湾には、数百年あるいは数千年も前に台湾に渡ってきたマレー・ポリネシア系の「原住民」と呼ばれる人たちが、対岸である中国大陸の福建あたりから台湾に来た漢族系の人たち、そしてやはり中国大陸から渡ってきた客家と呼ばれる人たちが住んでいた。
- (2) 日本統治時代が始まると、原住民は「高砂族」、漢族系の人たちは「本島人」、客家の人たちは「広東人」とよばれるようになった。
- (3) 台湾が日本の領土になったのは 1895 年の 4 月だったが、7月には早くも総督府が「国語学校」を開いている。ここでいう「国語」とはもちろん日本語のことだ。
- (4) 当時の帝国主義という世界的な潮流に即していえば、台湾が植民地の一環だったことは否めないが、植民地統治を教育から始めたことは世界にも例がないことだった。それまでの台湾での教育は、寺子屋のようなところで、中国伝統の「論語」などを素読するだけのものだったという。
- (5) 日本が新しい教育を台湾に導入したことにより、台湾の人々にとって、近代的な知識の吸収や、日本語を通じて世界の思想と接する機会が生まれた。李登輝が教養を重んじた日本時代の教育を評価するゆえんである。事実、李登輝の母校となる旧制台北高等学校が 1922(大正 11)年に、台北帝国大学に至っては、大阪帝大や名古屋帝大に先んじて 1928(昭和 3)年に設立されている。

2. (1) また、日本統治時代の台湾では多くの日本人が台湾の発展のために力を尽くした。

- (2) 代表的人物といえば、台湾南部の嘉南平原に当時東洋一と呼ばれた「烏山頭ダム」を建設した八田與一や、台湾の在来種の米改良に 10 年以上の年月をかけて成功させ台湾を一躍米の生産地に生まれ変わらせた磯永吉と末永仁。台湾の糖業発展に大きく貢献し、かつて日本の 5000 円札の肖像として描かれた新渡戸稲造。近代水道の敷設を推進し台湾の衛生を飛躍的に向上させた浜野弥四郎など枚挙にいとまがない。
- (3) 彼らの功績が、日本で大々的に取り上げられる機会は多くないが、八田與一の名前は台湾の教科書にも登場するし、磯永吉らが作り上げた台湾を代表する「蓬萊米」の名称は台湾ビールの原料として明記されるなど、台湾では広く知られている。

3. 李登輝の原点と日本の教育

- (1) 李登輝の祖先も、数百年前に中国大陸から渡ってきた客家の家系だ。李登輝いわく、ひいおじいさんの代に台湾へやってきたらしい。一家は台北北部にある、観光地としても有名な淡水からさらに北へ進んだ三芝に居を定めた。
- (2) ちなみに李登輝は「うちは客家なんだ」と言うが、厳密には「福佬客」と呼ばれる客家としての習俗や言語を放棄したグループに入る。

- (3) ひいおじいさんは、王源興おうげんこうという人が建てた赤レンガづくりの三合院さんごういん(上から見ると家屋がコの字型に配置された伝統的な建築様式)の家を買い取って住まいとした。そこから、この家は「源興居」と呼ばれるようになり、現在では「李登輝の生家」の代名詞として三芝の観光地になっている。
- (4) この地で李登輝は 1923(大正 12)年に生まれた。時代が昭和に入ると、台湾も内地同様に戦時体制に組み込まれる。ちょうど李登輝が青年時代を送った時代である。
- (5) 生や死が身近に感じられる時代に思春期を送った李登輝が、「生きる意味とは何か」「なぜ人は死ぬのか」「私は誰だ」「人生はどうあるべきか」などといった死生観に強い関心を持ったのも、時流のせいかもしれない。
- (6) 1930年代後半に入ると台湾では「皇民化運動」が始まり、戦時色がいつそう濃くなった。ここで李登輝は「徹底的に『公に尽くす精神』というものを叩き込まれた」という。「22歳まで日本人だった」と常々公言してはばからない李登輝の原点が、この時代に形作られたといえよう。

4. (1) 1945(昭和 20)年、第二次世界大戦で日本が敗れると、台湾は日本の統治から離れることになる。台湾の占領統治を担ったのは、国民党率いる中華民国だった。
- (2) 中華民国は戦時中、「国共合作」によって中国共産党と連携し日本と戦ったが、戦後は中国大陸で再び共産党と中国の覇権を争う「国共内戦」が起きていた。結果的に、国民党は国共内戦に敗れ、49年には国ぐるみで台湾へ逃れていくことになる。このとき中国大陸から台湾へ渡ってきた 100 万とも 200 万ともいわれる人たちは「外省人がいしやうじん」と呼ばれ、政府や省庁、企業のトップを独占し、独裁体制の象徴とされた(もともと台湾に住んでいた漢族系の人たちは、戦後「本省人ほんしやうじん」と呼ばれるようになった)。
- (3) 1947(昭和 22)年 2 月 28 日には、日本に代わって台湾の統治を開始した中華民国による、汚職や治安の悪化などに堪忍袋の緒を切らした民衆が蜂起する「228 事件」が起きる。これに対して国民党は中国大陸からの援軍を要請し、武力によって鎮圧した。その後、統治を容易にするため、数十年にわたり知識人や指導者層を処刑する「白色テロはくしよく」と呼ばれる弾圧を行ったのである。

(4) 李登輝夫人が「本当に恐ろしい時代だった」と漏らす、誰もがいつ連行されるかわからない時代の幕開けである。実際、李登輝は日本統治下の旧制高校、そして途中で切り上げたとはいえ帝国大学で知識層である。李登輝の身の安全を心配した親友に助言され、李登輝は親友の実家が経営していた米屋の倉庫で 1 ヶ月寝起きしたこともあるそうだ。

5. (1) 228 事件後の 1949(昭和 24)年に戒厳令が敷かれ、以後、1987(昭和 62)年に解除されるまでの 38 年間、台湾の人々にとっては長く暗い時代が続くことになる。
- (2) 国民党は「いつかは中国大陸を取り戻す」という意味の「大陸反攻」を掲げ、「動員戡乱時期臨時條款じきりんじじょうかん」を制定して憲法の機能を制限した。国民党と共産党が現在も内戦中であることを前提とし、国家総動員体制を敷くために憲法に追加された臨時的な条項だ。
- (3) これによって国民党の台湾における一党独裁体制が確立された。つまり、民主や自由、言論の自由、集会の自由などが完全に台湾の人々から奪い去られたわけである。

(4)李登輝が台湾大学で教壇に立っていた頃、講義を依頼されその準備をした。夫人は机に置かれた原稿をさりげなくのぞき見て、政府を批判している箇所などが多くあると「消しゴムでそっと消して」しまったそうだ。夫の身を案じるがゆえの行動だが、当時の台湾では、たった一言が文字通り命取りになっていたことの証左だろう。

台湾の民主化を世界にアピールした李登輝

6. (1)台湾の民主化の萌芽は、1975(昭和 50)年に蒋介石を継いだ息子、蔣経国の時代に現れた。経済水準が高まるにつれ中流階級が誕生。それによって人々の権利意識も高まり、同時に独裁体制を続ける台湾に対する国際社会からの風当たりも強くなり始めた。

(2)また前後して、それまで外省人で固められてきた閣僚に本省人を登用する「吹台青」政策が進められた。これによって本省人である李登輝も、農業経済のスペシャリストとして政務委員(無任所大臣)に登用される。蔣経国は 1987 年に戒厳令を解除し、それまで禁じられていた野党の結成も黙認。そうした流れのなかで、蔣経国は李登輝を副総統に任命したのである。

(3)1988(昭和 63)年 1 月 13 日、総統在任中の蔣経国が急逝すると、副総統の李登輝が憲法の定めにしたがい総統に昇格した。李登輝は、中華人民共和国が中国大陸を、中華民国が台湾を、それぞれ実効的に支配することを認め、国共内戦による非常時体制の根拠となっていた「動員戡乱時期臨時條款」を 1991(平成 3)年 5 月 1 日で廃止することを決めた。

(4)これによって、台湾と中国はお互いにまったく無関係な存在となり、台湾は独自に歩み始めることが可能になった。また、それまで国民党に牛耳られていた軍隊から、人事権を用いて要職にある人物を引き離し、軍を名実ともに「国家の軍隊」にすることに成功したのも、民主化のひとつのマイルストーンだったといえよう。

(5)さらに 1996(平成 8)年には、総統を国民が直接選ぶ方式を導入した。どうにかして民主主義を確固たるものにしたいという李登輝の願いが、ここに結実したわけである。これによって台湾の民主化はさらに前進し、李登輝は、その成果を世界にアピールする役割も果たした。冒頭で紹介した、米雑誌『Newsweek』の表紙に李登輝が登場したのは、この選挙で勝利し、就任式を迎えたときのものである。

(6)2000(平成 12)年の総統選挙では民進党の陳水扁が当選し、台湾史上初の政権交代が実現して、国民党は下野することとなった。その後、政権交代は 2 回行われ、台湾の民主主義は成熟を続けているが、同時に「台湾は中国とは別個の存在」と考える人々や、「自分は台湾人」というアイデンティティを持つ人々の割合も、ますます増えている。

7. (1)2020(令和 2)年、台湾もまた新型コロナウイルスに襲われたが、政府が国民を信頼し、国民も政府に協力するという「透明な民主主義」が功を奏し、世界でもトップレベルの新型コロナウイルス抑え込みという成功を収めた。

(2)現在、台湾に住む人々が民主主義や自由を当然の権利のように享受している裏側には、李登輝をはじめとする多くの台湾人の苦難と涙の歴史が隠されているのである。

<コメント>

著者の早川友久氏は、開倫塾の元塾生。足利市立山辺中学校、國學院栃木高校、早稲田大学卒業後、台湾と日本の架け橋として大活躍中です。本著は、李登輝台湾総統の活動を通して、日本人が知るべきことを具体的に示してくださる好著。これからの台日関係、国際関係、アジアや世界の発展を考える際のテキストです。是非、御一読ください。

2021年11月20日 林明夫記